

平氏隆盛の頃の腰刀と杏葉轡

鐘方正樹

I はじめに

平成 24 年度に実施した奈良市埋蔵文化財調査センター夏季速報展示「平氏隆盛の頃の腰刀と轡」で保存処理が完了した西大寺旧境内第 23 次調査土坑墓 S X 71 (奈良市教委 2010) 出土の腰刀 2 本と平城京跡第 157 次調査井戸 S E 41 (奈良市教委 1989) 及び平城京跡第 484 次調査井戸 S E 07 (奈良市教委 2006) ¹⁾ 出土の轡を公開展示した。その際、各資料の実測図を作成して検討したが、その内容は速報展示リーフレット No. 46 「平氏隆盛の頃の腰刀と轡」に概要の一部を記述したにとどまる。

そこで、改めて各資料の報告を行い、中世に盛行する腰刀と杏葉轡の変遷と意義について遺跡出土資料を中心に検討しておきたい。なお、リーフレット No. 46 の記載内容を本稿では一部修正している。

II 腰刀

(1) 西大寺旧境内第 23 次調査出土の腰刀 (図 1)

西大寺旧境内第 23 次調査で土坑墓 S X 71 から大小 2 本の腰刀が出土した。共伴した龍泉窯系輸入青磁碗 2 点と同安窯系輸入青磁小皿 3 点から 12 世紀後半の腰刀と推定できる。2 本ともに鉄錆で覆われた表面に黒漆膜が遺存していたため、その保存を優先した保存処理を平成 23 年度に行い、黒漆膜のおおよその形状が判明した。鉄刀身については、X 線撮影によりその外形を確認しただけであり、その輪郭を図に破線で示した。

図 1-1 は全長 49.0cm・刃長 37.9cm・刃幅 4.3cm で、0.85cm の反りがある。茎は長さ 11.0cm・幅 1.8～2.95cm で、茎尻に向かって幅が狭くなり、目釘穴は確認できない。棟区に比べて刃区の屈曲度合は鈍い。表面に残る黒漆膜の形状からみて外装 (拵) は鞘と柄で構成され、その固定形式は呑口式と推定できる。鞘・柄ともに腐朽して遺存しないので、材質は不明である。

鞘は指表・指裏に方形の凹みがあり、筭櫃 (指表) と小柄櫃 (指裏) に対応すると考えられる。筭櫃は長さ 7.1cm・幅 2.1cm で船底状に丸く凹み、その外側左下で 1cm ほど漆膜が突起する箇所が栗形となる可能性がある。小柄櫃は長さ 3.3cm 以上・幅 2.55cm で浅く箱形に凹む。鞘尻側から 1.5～2.5cm 間隔を空けて 3 条 1 単位の沈線が 6 単位刻まれ、そこから 11.6cm 前後を空けてさらに 2 単位が 2cm 間隔で刻まれる。鞘口は U 字形で、

それより 2.3cm ほど下がった箇所だけに幅広突線と沈線が 1 条ずつあり他の 3 条 1 単位の沈線と装飾方法を変えている。

柄は漆膜の残存状態が悪く、柄縁付近の状態以外はわからない。柄縁近くに幅広突線と沈線が 1 条ずつあり、それから 1.1cm 間隔を空けて 3 条 1 単位の沈線を刻んでいる。異なる装飾単位の間隔は、鞘と同じである。柄にも概ね等間隔に 3 条 1 単位の沈線を数単位刻んで装飾したと推測される。

図 1-2 は全長 27.2cm・刃長 18.4cm・刃幅 2.8cm で、0.35cm の反りがある。茎は長さ 8.5cm・幅 1.25～1.6cm で、茎尻に向かってわずかに幅が狭くなり、目釘穴は確認できない。棟区に比べて刃区の屈曲度合は鈍く刃先の方へ緩やかにのびる。表面に残る黒漆膜の形状からみて外装 (拵) は鞘と柄で構成され、その固定形式は呑口式と推定できる。鞘・柄ともに腐朽して遺存せず、材質は不明である。

鞘の漆膜はほとんど残っていないので、その形状は不明であるが、おそらく 1 と類似した装飾がおこなわれていただろう。

柄は漆膜が比較的残存したので、その形状をある程度うかがうことができる。柄縁は U 字形で、端から 1.6cm の位置に 1 条突線と 1 条沈線、そこから 0.7cm 空けて 1 条沈線があり、さらに 2.1cm 前後の間隔を空けて 3 条 1 単位と 2 条 1 単位の沈線を刻んでいる。

(2) 初現期の腰刀の様相

腰刀は 12 世紀中葉以降に一般化する (岡田 2002) と考えられているが、鎌倉時代の腰刀は伝世品がほとんどなく、遺跡から出土した 12～13 世紀の腰刀はその初現期の資料と位置付けできる。本稿で検討する西大寺旧境内例もその一つである。

初現期の腰刀を出土資料から考古学的に初めて検討したのが末永雅雄であり、それらを黒漆刻鞘腰刀と呼んで室町時代の鞘巻腰刀と柄鞘の製作方法の違いから区別した。黒漆刻鞘腰刀の柄鞘は表面に砥粉あるいは木屎を塗って下地とし、それに刻み目を入れて黒漆塗りで仕上げるのに対して、鞘巻腰刀は鞘木に刻み目を直接入れて製作しているという。そして、黒漆刻鞘腰刀が鞘巻腰刀の母型であると推考した。また、検討資料中に栗形や返角が確認できない点にも触れ、鞘の刻み目が帯からの離脱

を防ぐ役割を代用した可能性を述べた（末永 1931）。

末永の見解を踏襲して腰刀の変遷を述べた岡田賢治は栗形・返角が定型化する以前の段階を第Ⅰ期（12世紀）、栗形・返角が出現する段階を第Ⅱ期（13世紀）として区分する。そして、第Ⅱ期には筭の附装が認められるが、小柄の附装は遅れると推測した（岡田 2002）。

2000年代に入ると12～13世紀の黒漆刻鞘腰刀の出土報告が3例相次ぎ、具体的な検討ができるようになってきた。銅板上に栗形・返角を一体でつくり出す13世紀前葉の宮城県観音沢遺跡出土例（宮城県教育委員

会 1980）の存在から栗形・返角の出現を同時（第Ⅱ期）と岡田は考えたが、12世紀後葉～末頃の三重県雲出島拔遺跡例（図3-3）や京都府佐山遺跡例（図3-5）²⁾にはすでに栗形が認められる。ただし、返角はないので、栗形の出現は返角よりも早いとみられる。また、西大寺旧境内例も含めて鞘には櫃が設けられている。特に雲出島拔遺跡例と西大寺旧境内例では櫃が表裏にあるため、指表が筭櫃、指裏が小柄櫃に対応する可能性が高い。これらの特徴は後の腰刀外装として定式化していく内容の初現的様相を示していると評価でき、現状の資料でみる

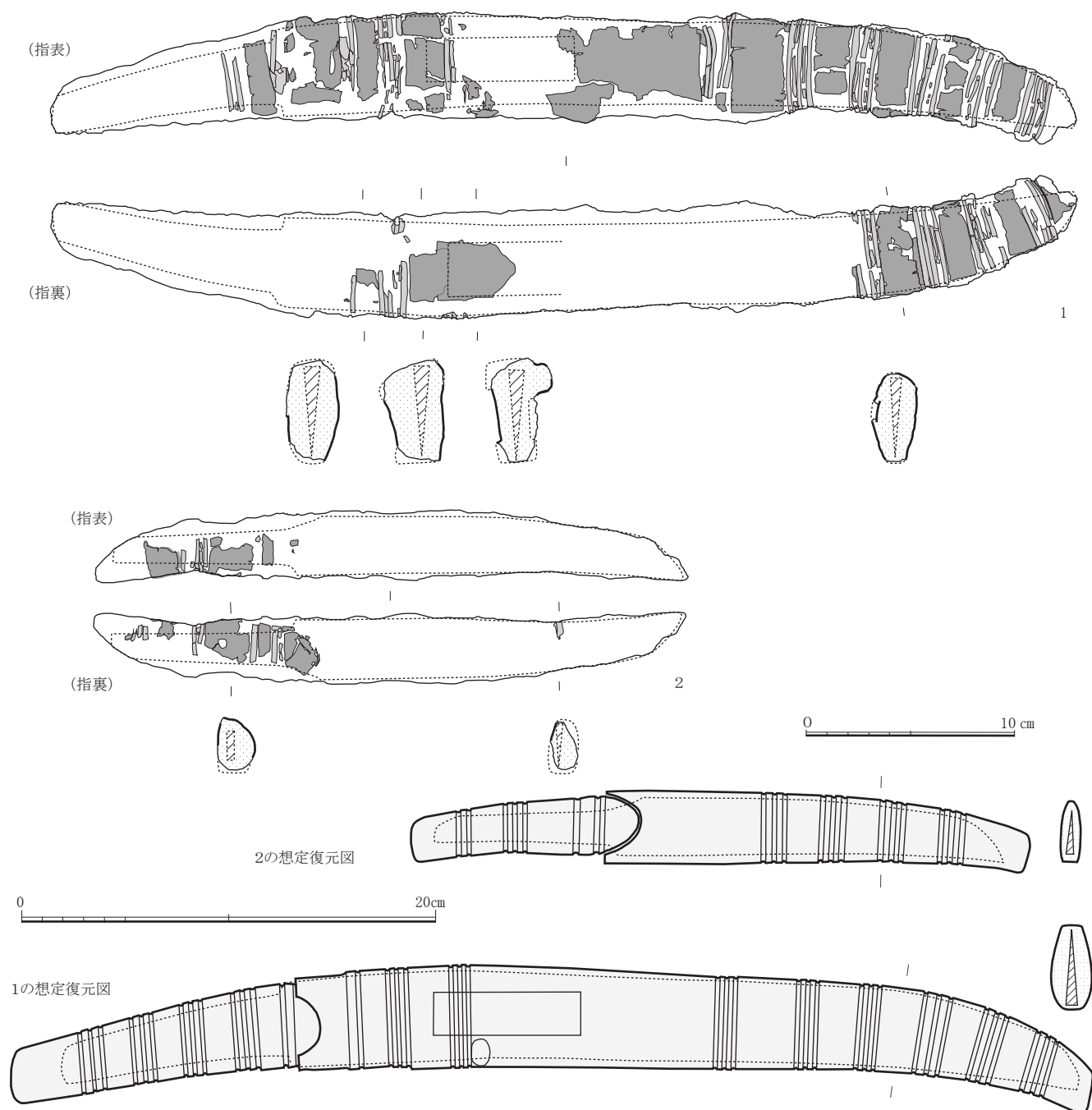


図1 西大寺旧境内第23次調査 土坑墓SX 71 出土腰刀とその想定復元（1/3）

限り 12 世紀後半でその有無が識別される。そして、それらの特徴は黒漆刻鞘腰刀でのみ認められ、漆塗でない他の型式の腰刀には今のところ確認できないことも注意しておかなければならない。腰刀にも所有者の身分に対応して優劣があったと考えられ、格の高い腰刀の外装として櫃や栗形は当初附装され始めた可能性が推測できる。

次に、黒漆刻鞘腰刀の柄鞘の条線装飾を検討してみたい。末永の詳細な観察に基づいて復元された京都府花背経塚例(図3-1)は、近接した経塚出土の仁平3(1153)年銘経筒から12世紀中葉の資料と推定されており、現在のところ最古の出土例である。柄縁・鞘口・鞘間に条線を刻まない部分(間帯)が認められる³⁾が、その配置は12世紀後葉以降の資料にも概ね継承される。西大寺旧境内(1)例と雲出島抜遺跡例は、遺存しない柄頭・鞘尻を除いて間帯と条線の配置、3条1単位の条線、鞘の指表・指裏両面に櫃を有するなど共通点が多い。愛知県小坂井経塚出土例(図3-4)は外装表面の欠損箇所が多く、間帯と条線を確認できるもののその配置状態はよくわからない。櫃や栗形も認められていない(末永1970)が、鞘間の間帯を3条線で2分割するような構成は雲出島抜遺跡例と類似するように見える。佐山遺跡例は、2条1単位の条線を基本とし鞘の指裏にのみ斧櫃があるなど異なる特徴を認めるものの間帯の配置には共通

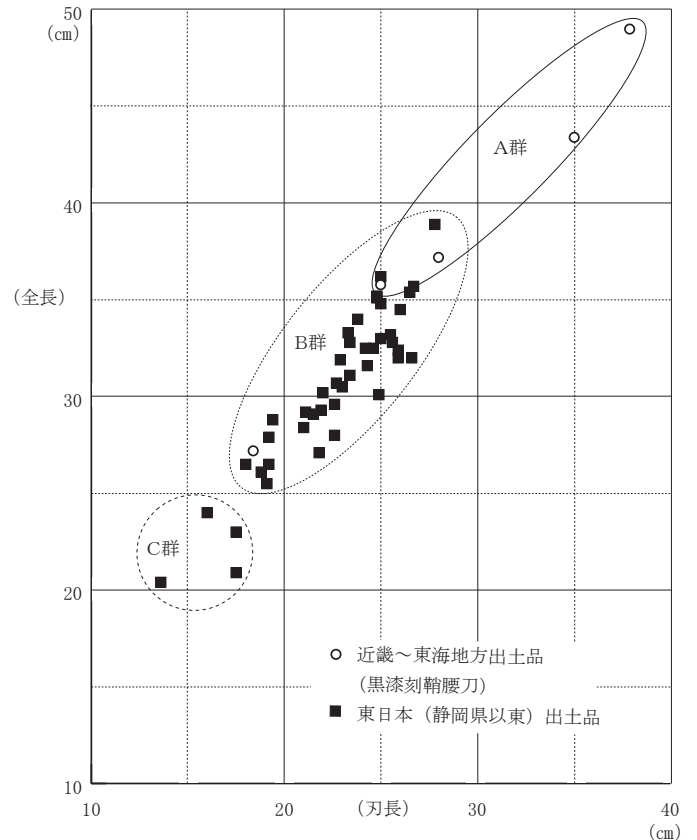


図2 12世紀頃の遺跡出土腰刀の大きさ

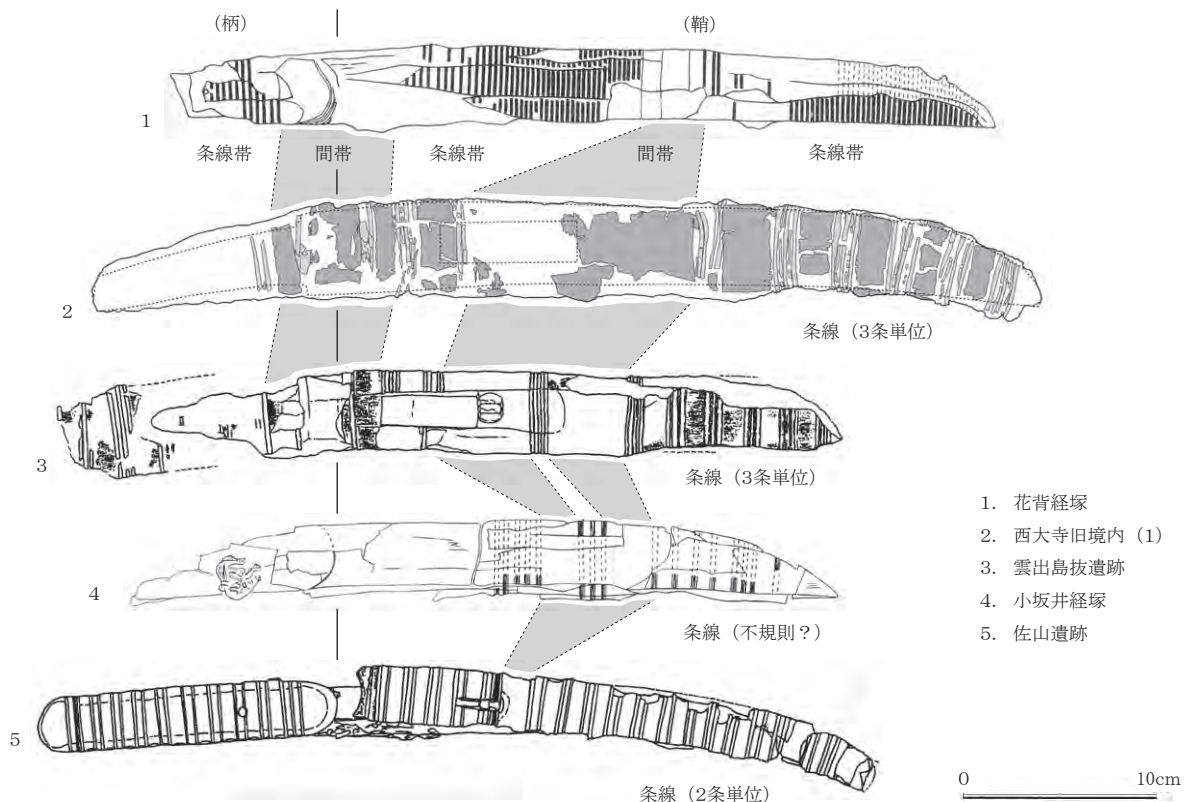


図3 出現期腰刀の外装比較

性がある。このような出土資料からみて、黒漆刻鞘腰刀には12世紀中葉以前に花背経塚例のような連続する条線帯を有し櫃や栗形を認めない資料が存在したが、12世紀後葉頃になると3条あるいは2条を1単位とする条線装飾を行い櫃や栗形を備える資料が現れてくると推測できる(図3)。

そこで、12世紀の主な腰刀出土例についてその大きさと櫃や栗形の有無などを検討してみよう。近畿～東海地方出土品と東日本(静岡県以東)出土品⁴⁾に分けて刀身の全長と刃長の関係を図2に示した。主な特徴からA～C群に大別できる。

A群; 近畿～東海地方で出土した黒漆刻鞘腰刀のうち、櫃や栗形を備えるもの。その母型となった花背経塚例を含む。全長35cm以上で、40cmを越える大型品もある。

B群; 東日本出土例の大半が相当する。西大寺旧境内(2)例以外はすべて漆塗でなく、櫃や栗形を備える確実な例もない。花背経塚出土の他例6点(刃長21.8～26.6cm・茎長8～9cm前後と推定)もB群内に収まる(末永1928)。全長25～40cmの中型品である。A群よりも相対的に小さい例が大半を占める。

C群; 東日本出土例の中に認められる全長25cm以下の例である。A・B群は全長と概ね正比例して刃長が伸びるのに対して、C群は刃長の変動が大きくみえる。

櫃や栗形を備える例は相対的に大形の黒漆刻鞘腰刀(A群)でのみ認められ、近畿～東海地方でのみ出土し、静岡県以東の東日本では黒漆刻鞘腰刀そのものが出土しない。B群は、西大寺旧境内(2)例1点を除いて、それらの外装に黒漆は認められず、花背経塚出土品中に薄鉄板でつつむ例1点(末永1928)がある他は白木造りとみられる。なお、柄木に条線を直接刻む例が堂ヶ谷1号経塚出土品(報告番号65)に認められる(財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2010)ので、鞘巻腰刀も同時期に製作されていた可能性がある。C群は刀子の大きさに近く、多様な機能に合わせて刃長が変動するような特徴を有していた可能性が想定できる。

以上の検討内容から、相対的に大型の黒漆刻鞘腰刀は近畿～東海地方で製作された格式高い外装を有し、以後の腰刀に継承されていく櫃や栗形を最初に備え始めた点で重要な資料と評価できる。そして、13世紀以降に他の形式へとその外装が漸次的に広まっていくと想定されよう。13世紀前葉の宮城県観音沢遺跡出土黒漆棒鞘

腰刀には筭櫃と栗形・返角を備えており、黒漆拵の腰刀が白木拵の腰刀より格式高いものとして12～13世紀頃には広く認識されていたように思われる。

III 杏葉轡⁵⁾

(1) 平城京跡第157・484次調査出土の杏葉轡(図4)

図4-1は平城京跡第157次調査井戸SE41から出土した杏葉轡である。引手一对と左側面の遊環を欠くが残存状態は比較的良好で、現在も可動性が残る。厚さ0.3cmの鉄板を蕨手文様状の逆ハート形に裁断して鏡板をつくる。鏡板の鉄板幅は尖頭部で2.1cm、左右で1.1～1.2cmである。その尖頭部を直線的に切断し、裏面に立間を重ねて鉋留する。立間を含めた鏡板の長さ13.8cm・幅9.6cmである。立間は長さ7.0cm(鏡板と2.0cm重複)・幅1.4cm・厚さ0.3cmで、先端を打ち延ばして外方に巻き、面繫を取付けるための立間壺をつくる。銜は全長17.9cmの2連式で、輪違環に比べて銜先環が目立って大きく、銜先環は輪違環の約2.4倍の大きさである。環の断面は円形、軸部の断面は方形である。遊環は径0.7cmの鉄棒を曲げてつくり、内径1.8cmである。共伴した出土土器から12世紀後半の資料と推定できる。

図4-2は平城京跡第484次調査井戸SE07から出土した杏葉轡である。右側面の引手を欠失し、左側面の鏡板と引手の一部が欠損する。左側面の鏡板を除いて全体が錆着しているため、本来の形状を復元的に図示した。鏡板と立間は一体でつくられているが、その大きさと形状が左右で異なる。右側面の鏡板は径0.8～1.0cmの鉄棒を蕨手文様状の逆ハート形に曲げてつくるが、その際に左右1箇所ずつを1度ねじっている。また、立間は左右の鉄棒を2回ずつねじって結合し、その先に立間壺をつくる。立間を含めた鏡板の長さ11.8cm・幅9.3cmである。一方、左側面の鏡板は幅1.1～1.2cm・厚さ0.4cm前後のやや扁平な鉄棒の下部を中央で切り開き左右に大きく湾曲させてつくられる。上部は立間の軸部となるが、その上端も中央で切り開き垂直に起こして左右を湾曲させ立間壺とする。立間を含めた鏡板の長さ9.7cm以上・幅7.6cmで、右側面の鏡板より一回り小さい。鏡板の先端部分が欠失するため、右側面のような蕨手文様状のハート形になるのかどうかは不明である。銜は全長17.25cmの2連式で、輪違環に比べて銜先環は少し大きい程度となる。遊環がなく、引手は銜先環に直接取り付く。共伴した出土土器から11世紀後半の資料と推定できる。

両資料を比較すると、全体的な形状は類似するものの製作方法や個々の特徴に明らかな相違点が認められる。

まず、鏡板の製作方法については、1（前者）が鉄板を裁断して鏡板をつくり別造りの立間を鋳留するのに対して、2（後者）は鉄棒を一部に振りを加えつつ曲げるか扁平な鉄棒を切り開いて曲げ立間と一体でつくられている。次に銜の形状を比較すると、2より1の方が銜先環の大きさが明らかに大きい。この違いは銜先環・輪違環のつくり方の相違に起因すると思われ、1は鉄棒の先を打ち延ばし薄くして曲げるのに対して、2は鉄棒をそのまま曲げているだけである。また、引手の連結方法でも1は遊環を介して連結するが、2には遊環がなく銜先環に直接連結される。両者の推定時期には100年前後の隔たりがあり、その間にこのような技術変化が生じた可能性を想定するか、別系統の製作技術の反映とみるか二つの見方が想定できる。なお、後述のとおり筆者は後者の見方で資料の検討を行うのが妥当であると考え。

さらに、2の鏡板が左右で異なる点についても言及し

ておく。このような例は複環式轡において4例ほど確認されており、矯正用の責轡（片山1987）との関連を想定する見解（鈴木1999）と補修品と考える見解（津野2012）がある。ただし、責轡は銜を多様に変えてつくられるものであり、本例には適応しない。よって、左側面の鏡板のみを補修時に取り換えた可能性が高いと推察する。そうした場合、扁平な鉄棒を切り開き立間と一体で鏡板を製作する方法は鉄棒を曲げて鏡板を製作する方法よりも簡便なために採用されたとみることもできる。

2) 手向山八幡宮所蔵の杏葉轡

平城京跡出土の杏葉轡を検討するにあたり、奈良市手向山八幡宮所蔵の杏葉轡を類例として実測調査することができたので、その内容について記しておきたい⁶⁾。

調査したのは昭和38年に重要文化財として一括指定された移鞍の中の轡2双である。両轡は同形同大の杏葉轡で、製作方法も同じであり、鎌倉時代の製品と考えら

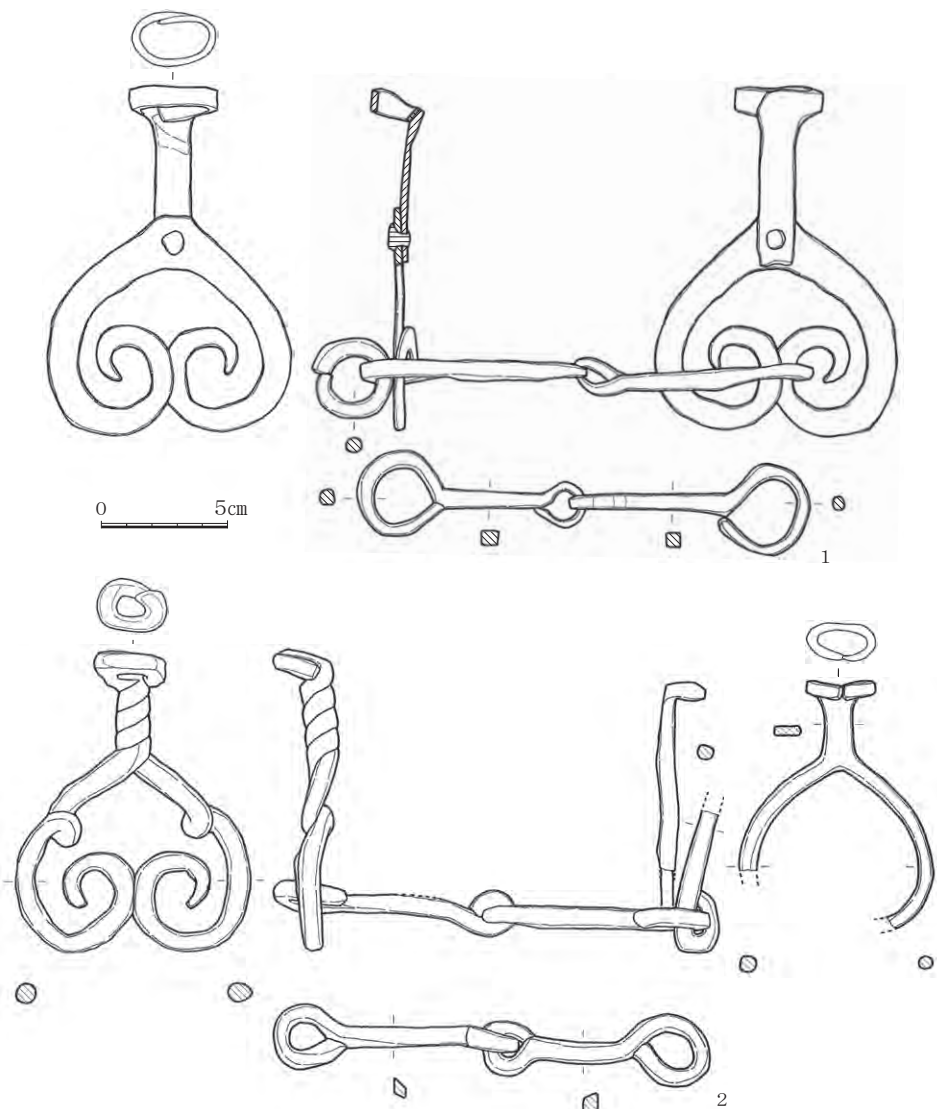


図4 平城京跡第157・484次調査出土の杏葉轡（1/3）

平氏隆盛の頃の腰刀と杏葉轡

表1 遺跡出土の杏葉轡一覧

番号	遺跡名	出土地	時期	全長×幅 (立間含む)	遊環の 有無	分類	文献
1	林ノ前遺跡	青森県八戸市	11 世紀	14.2 × 9.8	不明	A I	青森県教育委員会 2006『林ノ前遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 415 集
2	新田遺跡	宮城県多賀城市	13 ～ 14 世紀?	13.2 × 7.8	不明	AⅢa	多賀城市埋蔵文化財調査センター 1988『新田遺跡』多賀城市文化財調査報告書第 18 集
3	信夫山頂遺跡	福島県福島市	14 世紀?	15.35 × 9.5	不明	Ba	時枝務・高橋充 2012「信夫山頂遺跡出土品の研究(2)」『福島県立博物館紀要』第 26 号
4	元総社蒼海遺跡群	群馬県前橋市	13 ～ 14 世紀?	14.2 × 8.5	有	AⅡa	前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2010『元総社蒼海遺跡群 (28)』
5	宮久保遺跡	神奈川県綾瀬市	12～13 世紀?	13.0 × 9.1	有	AⅢa	神奈川県立埋蔵文化財センター 1990『宮久保遺跡Ⅲ』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 15
6	高林寺遺跡	神奈川県平塚市	11 世紀?	11.9 × 8.5	不明	A I	平塚市教育委員会 1989『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書2 昭和 62 年度発掘調査の報告』
7	岩倉遺跡	新潟県糸魚川市	14 世紀?	11.0 × 5.5	有	Bb	新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2003『一般国道糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書 岩倉遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 114 集
8	上原遺跡	山梨県北杜市	10 世紀後半	13.9 × 7.7 13.3 × 7.8	有	A I	北杜市教育委員会 2022『上原遺跡 県営農地環境整備事業天王原地区ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』北杜市埋蔵文化財調査報告第 46 集
9	松原遺跡	長野県長野市松代町	9世紀	13.4 × 9.1	有	A I	上田典男 1999「長野市松原遺跡出土の「杏葉轡」について」『長野県埋蔵文化財センター紀要』7
10	天神畑遺跡	滋賀県高島市	13 世紀	10.6 × 5.1	有	Bb	滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会 2013『天神畑遺跡・上御殿遺跡』鴨川補助広域基幹河川改修事業（青井川）に伴う発掘調査報告書1
11	平城京跡 (第 157 次)	奈良県奈良市法連町	12 世紀後半	13.8 × 9.6	有	AⅢb1	奈良市教育委員会 1989『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 昭和 63 年度』
12	平城京跡 (第 484 次)	奈良県奈良市杏町	11 世紀後半	11.8 × 9.3 9.7 以上 × 7.6	無	AⅡa AⅡb	奈良市教育委員会 2006『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 14 年度』
13	不明	奈良県	13 ～ 14 世紀?	14.1 × 8.4	不明	Ba	河上邦彦 2000「大和出土のかしははみ」『青陵』第 106 号
14	長尾谷遺跡	兵庫県龍野市揖西町	13 世紀	12 以上 × 10.0	有	AⅢb2	龍野市教育委員会 1999『長尾・小畑遺跡群』龍野市文化財調査報告 21
15	草戸千軒町遺跡	広島県福山市草戸町	14 世紀中～後半	14.5 × 8.5	不明	AⅢa	広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1994『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ』
16	新平田遺跡	鹿児島県伊佐市	13 世紀初～前半	10.8 × 6.9	有	AⅡa	大口市教育委員会 1997『新平田遺跡・辻町B遺跡』大口市埋蔵文化財発掘調査報告書 20

表2 杏葉轡伝世品一覧

番号	資料名	所蔵・保管	時期	全長×幅 (立間含む)	遊環の 有無	分類	文献
1	杏葉轡（小諸1）	懐古神社（徴古館）	12 ～ 13 世紀?	14.6 × 9.5	有	AⅢb2	風間春芳 1999「長野県内の杏葉轡3例について」『長野県考古学会誌』90 号
2	杏葉轡（小諸2）	懐古神社（徴古館）	13 ～ 14 世紀?	13.4 × 8.8	有	AⅡa	同上
3	金銅装唐鞍附属 杏葉轡（銅製）	二荒山神社	14 世紀	13.5 × 7.3	有	Ba	日本馬具大鑑編集委員会編 1991『日本馬具大鑑』第2巻古代下
4	移鞍附属杏葉轡1	手向山八幡宮	13 世紀	11.8 × 8.5	無	AⅡa	同上
5	移鞍附属杏葉轡2	手向山八幡宮	13 世紀	11.5 × 8.6	無	AⅡa	同上
6	杏葉轡	手向山八幡宮	13 世紀		無	AⅡa	同上
7	杏葉轡（銅製）	豊原北島神社	13 世紀		有	Ba	松平定信編 1800『集古十種』兵器馬具巻1「備前國上寺村八幡宮蔵佐々木盛綱銜圖」
8	杏葉轡（銅板包み）	高津古文化会館	13 世紀	14.2 × 7.3	無	Ba	日本馬具大鑑編集委員会編 1991『日本馬具大鑑』第2巻古代下
9	杏葉轡（銅製鍍銀）	東京国立博物館	13 世紀	17.0 × 8.6	有	Ba	同上
10	杏葉轡	東京国立博物館	13 ～ 14 世紀?		有	AⅡa	根岸競馬記念公苑 馬の博物館 1,983『特別展書』
11	杏葉轡	宝永堂	13 世紀?		無?	AⅡa	同上

れている。そのうちの1点を実測し、図5に示した。

鏡板は断面半円形の鉄棒を逆ハート形に曲げて立間と一連で製作されており、立間との接続箇所で端部を重ねて鍛接する。立間軸部は打ち叩いて断面板状となり、先端を打ち延ばし楕円形に曲げて立間壺をつくる。分離していた蕨手文様状の巻き上げが一体化しているのが大きな特徴である。立間を含めた鏡板の大きさは、左側面で長さ11.8cm・幅8.5cm、右側面で長さ11.65cm・幅8.55cmである。

銜は全長19.4cmの2連式で、輪違環に比べて銜先環が目立って大きく、銜先環は輪違環の約2.6倍の大きさがある。銜先環及び軸部の断面は円形で、別造りの銜先環を軸部に溶接している。

引手は銜先環に直接取り付けしており、遊環がない。引手の全長は左右側面ともに13.5cmである。軸部は幅1.1～1.2cm・厚さ0.3～0.4cmの板状で、片側に楕円形の立間壺をつくる。

もう1つの轡の寸法を付記すると、立間を含めた鏡板の大きさは左側面で長さ11.4cm・幅8.4cm、右側面で長さ11.5cm・幅8.6cm、銜の全長19.1cm、引手の全長は左側面で13.0cm、右側面で13.25cmである。

鉄棒を曲げて立間と一体で製作する点や銜先環に引手を直接連結する点などの特徴が平城京跡第484次調査出土轡と共通しており、両者が同系列の製品である可能性を推考させる。

(3) 杏葉轡の分類 (図8)

杏葉轡は主に12～14世紀にかけて盛んに製作された轡の一形式で、鏡轡とともに中世を代表する馬具の一つとされている。昭和12(1937)年発行の『日本歴史

考古学』で後藤守一が「遺物を見ることは極めて稀れである」と記すとおり、絵巻物や和書に描かれた轡と鎌倉時代の伝世品がかつて主な研究対象であった(後藤1937)。それらの資料を中心に杏葉轡を検討した片山寛明は多頭形(一)・三葉形(二)・逆ハート形(三)の3つに大別できることを示した。そして、鏡板から高く突出する立間や鏡板の外側から遊環を介して引手を付ける連結法などの特徴を有する和式轡の基本的形態がここに定式化すると述べる(片山1992)。その後、長野県松原遺跡で9世紀にまで遡る杏葉轡が出土し、長野県内の小諸市懐古神社所蔵品2例とともにその変遷が検討された(風間1999)。出土品・伝世品・絵画史料を総合的に概観し、杏葉轡をⅠ類(鏡板・立間及び蕨手様の巻き上げが別造り)とⅡ類(鏡板・立間及び蕨手様の巻き上げが一体化)に分類した点は特に注目できる。

現在の杏葉轡出土の分布を概観すると、半数以上の16例中9例が東日本から出土している。そのうち甲信越から関東地方で6例が出土し、分布が集まる傾向を看取できる。また、近畿地方でも4例の出土が認められ、そのうち3例が奈良に分布する(図6・表1)。伝世品の所在地(表2)も甲信越から関東地方と近畿地方がほとんどであり、出土品の分布傾向と概ね合致する点は興味深い。

遺跡出土品から考古学的に杏葉轡の系譜を検討したのが鈴木一有で、片山分類を踏襲しつつA類(逆ハート形)とB類(三葉形)の2つに大別し、伝世品や出土品等の現存資料がない多頭形はB類の中に包摂した(鈴木1999)。そして、A類を鏡板が円環状のA1類と逆ハート形のA2類に分類し、さらにA2類を蕨手部分が分離

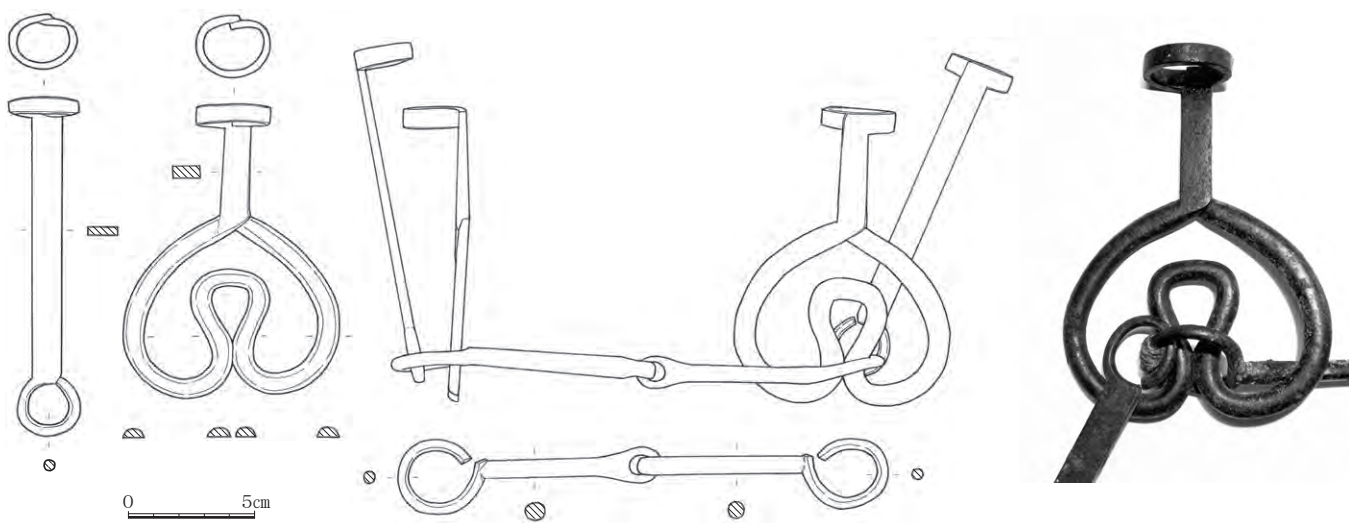


図5 手向山八幡宮所蔵の杏葉轡(1/3)と鏡板写真

※ 番号は表1と対応する

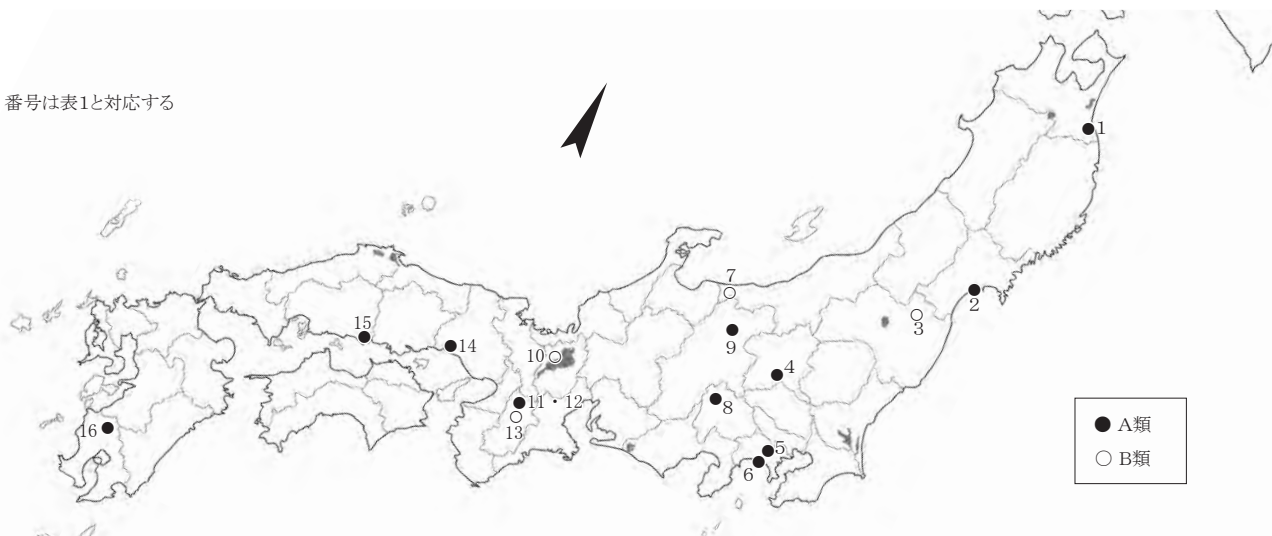


図6 杏葉轡出土地の分布

する古相と一体製作される新相に細分する。平城京跡第157次調査出土例はA 2類古相であるが鏡板の内側が円環状を呈しており、立間が別造りである点にも着目してA 1類からの移行形態と評価している。

その後、古代轡の再集成を行って変遷とその意義を論じた津野仁は、鈴木研究成果を踏襲して杏葉轡についても検討している。杏葉轡で主体化し和式轡の基本的形態として定式化する立間を壺付き立間と呼び、素環系鏡板付轡や複環式轡を含めて9世紀以降に普及していくことを明らかにした。また、12世紀以降に銜先環が相対的に大きくなること、遊環を介して引手を連結する遊環連結法⁷⁾は中世まで存続しない他形式の轡でも古代から認められるので片山の想定どおりに和式轡の指標とするのは難しいことを指摘している（津野 2012）。

これまでの研究史を踏まえ、本稿では鈴木分類に従い杏葉轡をA類（逆ハート形）とB類（三葉形）に大別する。ただし、A類については増加した出土資料の再検討に伴って鈴木と異なる基準で以下のように細分類した。

A 1類；主に鉄棒を使用して円環形あるいは逆ハート形の鏡板をつくり、別造りの壺付き立間を先端折り曲げによる鍛接で連結するもので、松原遺跡・山梨県上原遺跡・神奈川県高林寺遺跡・青森県林ノ前遺跡から各1点ずつ出土している。林ノ前遺跡例は断面板状でありA III類と似るが幅が狭く、同遺跡出土の複環式轡も同様の断面板状であるため、その影響を受けたものと理解できる。おそらく、鉄棒で外形をつくった後にたたいて板状に仕上げたものと思われる。複環式轡では、新しい段階（9世紀後半以降）になると断面板状になる傾向がすでに指摘されている（鈴木 1999）。

なお、津野が挙げる熊本県灰塚遺跡例（9～10世紀）には立間推定位置に2箇所の連結痕跡が認められる（熊本県教育委員会 2001）。鉸具造り立間系・矩形立間系環状鏡板付轡が10世紀まで存続することが確認されており（津野 2012）、本例には矩形立間を連結していた可能性があるのでここではA I類から除外しておく。立間形状が異なる本例を除けば、A I類の分布は東日本に限られる。

松原遺跡例は9世紀前半、上原遺跡例は10世紀後半、林ノ前遺跡例は11世紀頃の資料であり、9～11世紀にかけて使用されたことがわかる。この中で、轡の構造や製作方法をよく観察できる上原遺跡例（図7）は重要な資料である⁸⁾。厚さ0.6cm前後で断面隅丸方形の鉄棒を円形の蕨手文様状に曲げて鏡板をつくり、別造りの壺付き立間を鍛接する。立間は一つしか遺存せず欠損して直接接合しないが、それを含めた鏡板の大きさを復元すると右側面の長さ13.9cm・幅7.7cm、左側面の長さ13.3cm・幅7.8cmとなる。銜は全長19.5cmの2連式で、銜先環は輪遊環の約2.4倍の大きさである。引手は残存しないが、楕円形の遊環に連結すると想定される。

上原遺跡例における銜両環の大きさの比率や鉄棒の先を打ち延ばして曲げる銜先環の製作方法（打ち延ばし法）は、平城京跡第157次調査出土例と共通しており注目できる。津野は12世紀以降における相対的な銜先環の大形化を轡の編年指標として評価するが、打ち延ばし法によってこの時点で十分大きくなっていることが看取できる。

鏡板の形状をみると、9～10世紀の出土例は円環形に限られるが、11世紀になると逆ハート形の出土例が

認められるようになる。しかし、両者の間に漸移的な型式変化を想定できるような資料は今のところ見当たらない。時期不明の高林寺遺跡例は11世紀頃の資料ではないかと思われるが、鏡板上端部が丸いため逆ハート形とみなすには至らない。後述するAⅢ類b2系の存在から円環形の存続も想定できるので、11世紀には円環形と逆ハート形が併存した可能性が高いと推考する。

AⅠ類では当初から壺付き立間と遊環連結法が認められ、実用的で簡素なつくりを実現した形状であった。このことが、やがて中世に杏葉轡が盛行する要因になったのではないと思われる。

AⅡ類；鉄棒を使用して鏡板と壺付き立間を一体で製作するもので、鏡板の断面形には方形・円形・半円形があり、扁平化しない。鉄棒にねじりを加えたりしつつそのまま曲げて製作するa系と鉄棒を切り開き曲げて製作するb系が認められる。平城京跡第484次調査出土例は右側面がa系、左側面がb系であり両系列は同時期に併存することがわかる。b系の製作方法は壺の環が中央で接合されるという特徴があり、9世紀末頃の下野国分尼寺跡出土蒺藜轡銜（栃木県教育委員会2011）などにみられるので、類例は少ないながらも系列的に技術が存続したと考えられる。

現在のところ、11世紀後半の資料1点のみであるが、11世紀前半頃の複環式轡に壺付き立間を一体で製作する東京都落川遺跡例があるので、AⅡ類の出現も同時期まで遡るのではないかと推察できる。

壺付き立間と鏡板を一連で製作するため、鏡板の上端が伸びて逆ハート形になるという特徴を看取できる。逆ハート形のAⅠ類は、AⅡ類の影響を受けて現れたもの

と推測する。

a系は資料数が少なく未だ十分な変遷を追えないものの、13～14世紀頃と推定する元総社蒼海遺跡例や小諸市懷古神社伝世品2等の形状へ変遷していくと考えられる。これらの形状には、本来分離していた蕨手様の巻き上げが連結し一体化してつくられるという特徴が認められ、風間分類のⅡ類に相当する。同様の特徴が認められる手向山八幡宮所蔵品・宝永堂所蔵品や蕨手様の巻き上げがなくなり隅丸三角形の環状となる13世紀前半頃の新平田遺跡例も、ねじりはないが同系列の中で理解できる資料と判断できる。

なお、遊環連結法が認められない手向山八幡宮所蔵品において銜先環に直接引手を連結する特徴は、平城京跡第484次調査出土例と共通しており、地域的な連結法の存続を示唆する点で興味深い。

AⅢ類；鉄板を裁断あるいはたたくなどして、鏡板の断面形が扁平な板状となるように製作するもので、鏡板と壺付き立間を一体でつくるa系、両者を別造りして銕留するb系が認められる。a系には蕨手様の巻き上げが分離する宮城県柳之御所跡例や神奈川県宮久保遺跡例等⁹⁾と連結し一体化する宮城県新田遺跡例や広島県草戸千軒遺跡例等がある。後者の例にはAⅡ類a系と同様の特徴がみられ、14世紀に下がる例がある点から後出資料と推測できる。

b系は、さらに鏡板の形状から逆ハート形のb1系と円環形に近いb2系に分かれる。平城京跡第157次調査出土例はb1系である。b2系はAⅠ類円環形を異なる製作方法で模してつくった轡と想定される。

B類；鉄板を裁断するなどして三葉形の鏡板をつくるも

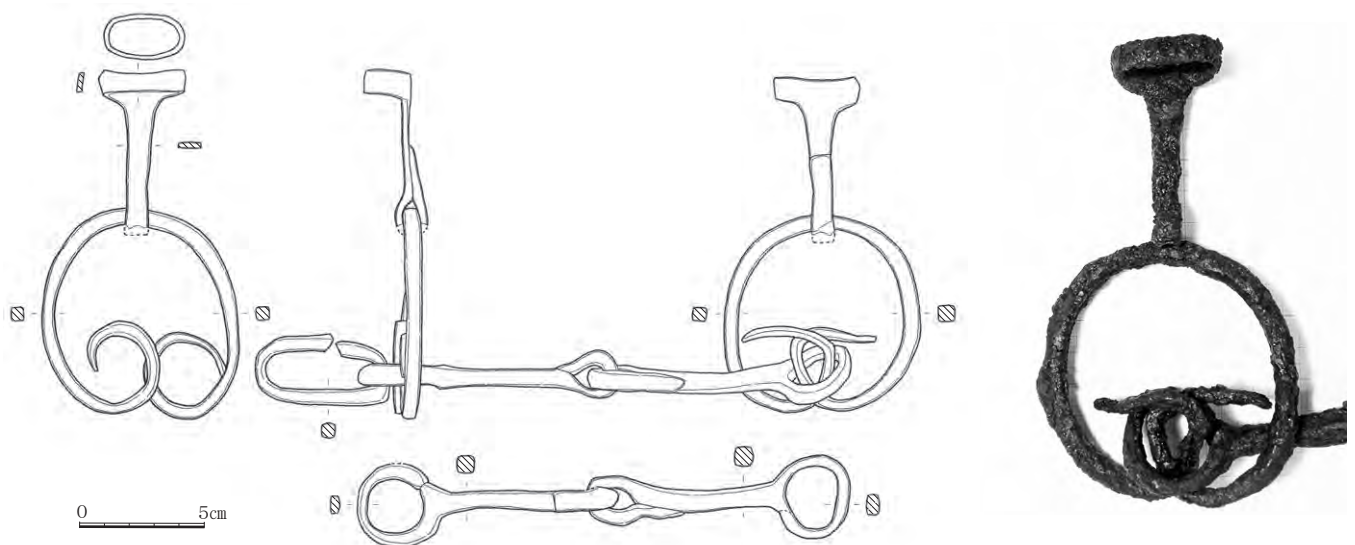


図7 上原遺跡出土の杏葉轡(1/3)と鏡板写真

ので、基本的に鏡板と壺付き立聞を別造りして鉾留する。ただし、伝世品を含めて鑄造品も少なからずあり、形式化が顕著である。鏡板内部の板や立聞との鉾留箇所まで三葉形につくる例が多い。立聞壺を方形につくる点がA類と異なり、特徴的である。現在のところ、東日本と近畿地方からしか出土していない。通有の大きさのa系と小型品のb系が認められる。

a系の奈良県内出土例は鏡板内側の三葉形板も別造りして鉾留し、立聞との鉾留箇所を三葉形につくらない点で古相を示す資料と思われる。

b系の滋賀県天神畑遺跡例は鑄造品で、鏡板と壺付き立聞を一体でつくるにもかかわらず連結箇所に鉾が形式的に打ち込まれている。小型品である点と合わせて考えれば、実用品でなく奉納品あるいは祭祀関連の遺物である可能性が高いだろう。

(4) 杏葉轡の変遷 (図8)

遺跡出土の杏葉轡については、以上の分類に基づいて次のように初現期・成立期・確立期・展開期の順で変遷を理解できるのではないかと推察する。

初現期 9～10世紀にかけてAⅠ類が東日本で出土するようになるが、古代以来の複環式轡が主体的に使用されており、出土例も未だ多くはない。ただし、壺付き立聞が当初から附属するなど中世の杏葉轡と直接的な系譜関係を認め得る特徴も看取でき、中世的な轡組成完成に至る第Ⅰの画期と考える津野の見解を再確認できる。

そして、9世紀に古代の轡型式(鑢轡・蒺藜轡)がなくなり、10世紀前半になると古墳時代後期から継承されてきた鉸具造り立聞系・矩形立聞系環状鏡板付轡もみられなくなるため、津野はこの時期を轡の新旧鏡板型式の交替期に位置付けている(津野2012)。

成立期 11世紀後半の平城京跡第484次調査出土例の存在等から、11～12世紀中頃までを成立期と考える。その大きな理由は、鏡板と壺付き立聞を一体で製作し鏡板が逆ハート形となるAⅡ類が近畿地方で現れ、その影響が東日本の一部で認められるようになる点である。次の確立期に主体化する逆ハート形と旧来の円環形が併存するようになったと推定する。

11世紀には、甲斐守源頼信が追討使となり降伏させた平忠常の乱(1028～1031年)や陸奥守源頼義・源義家が平定させた前九年(1051～1062年)・後三年(1083～1087年)の役があった。これらの戦乱を契機として、河内源氏は東国武士との主従関係を強化し坂東を統括する地位を固めていったと評価されている(福田1995・鈴木2012・倉本2022)。このような背景に基

づいて都の武者(中央軍事貴族)と東国武士の交流が活性化し、東国の鏡板意匠等が近畿地方で採用されてAⅡ類の製作が始まると考えておきたい。

確立期 12世紀後半において扁平な鏡板のAⅢ類が出現し主体化する。鏡轡の出現とも連動しており、轡の中世化の第Ⅱの画期と津野が位置付ける時期(津野2012)に相当し、ここに中世的な轡が確立する。立聞一体造りのa系とともに立聞別造り鉾留のb系が新たに出現する。b系には鏡板が逆ハート形のbⅠ系と円環形のbⅡ系が認められる。bⅡ系はAⅠ類円環形の系譜をひくものと想定され、AⅠ類は姿を消す。これまで立聞別造り例から立聞一体造り例へと単系的な型式変化を想定する見解(鈴木1999・津野2012)が示され、平城京跡第157次調査例はその移行期の資料と理解されていた。しかし、13世紀の長尾谷遺跡例がAⅢ類bⅡ系であり、杏葉轡B類や鏡轡が立聞別造り(鉾留)である点などから、そのような理解は妥当性を欠くと言わざるを得ない。

そこで、新たな鉾留接合を導入したAⅢ類b系に杏葉轡B類や鏡轡と同じ製作方法が認められることこそ重要視する必要性を考える。すなわち、同じ形状・大きさの立聞を作製して異なる形状の鏡板に鉾留することで、異形式の轡を容易につくり分けることができるからである(図9)。そして、これらの鏡板が鉄板を裁断して製作された平板なつくりになっていることも見逃せない。AⅢ類は轡全体が平板化する中で現れた杏葉轡の類型であり、馬具の量産化指向がそこには反映されている。

12世紀後半は保元・平治の乱(1156・1159年)や治承・寿永の乱(1180～1185年)といった大規模な戦乱が続き、その常態化に伴い武装具や馬具の需要が大きく高まる時期であるため、その量産化の必要性が背景にあったと推察する。また同時に、異形式の轡を容易につくり分けられる製作方法となっている点は、轡形式による騎乗者の序列化が進展したことを示すと想定できる。

轡の序列化を明確に示すのが法住寺殿跡W10土壇出土の鏡轡である。この鏡板には鶴の象嵌があり、精巧な鍬形を備える甲冑や華美な蒔絵鞍などが共伴する。W10土壇は、かなり高位の武将の墓と推定されており、法住寺合戦(1183年)で敗死した源光長が被葬者である可能性も示されている(財団法人古代学協会1984)。また、岩手県志羅山遺跡(財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2000)・宮城県中野高柳遺跡(宮城県教育委員会ほか2005)出土の鏡轡にも鴛鴦等の象嵌があり、これらは都の工人が関係した奥州藤原氏直轄

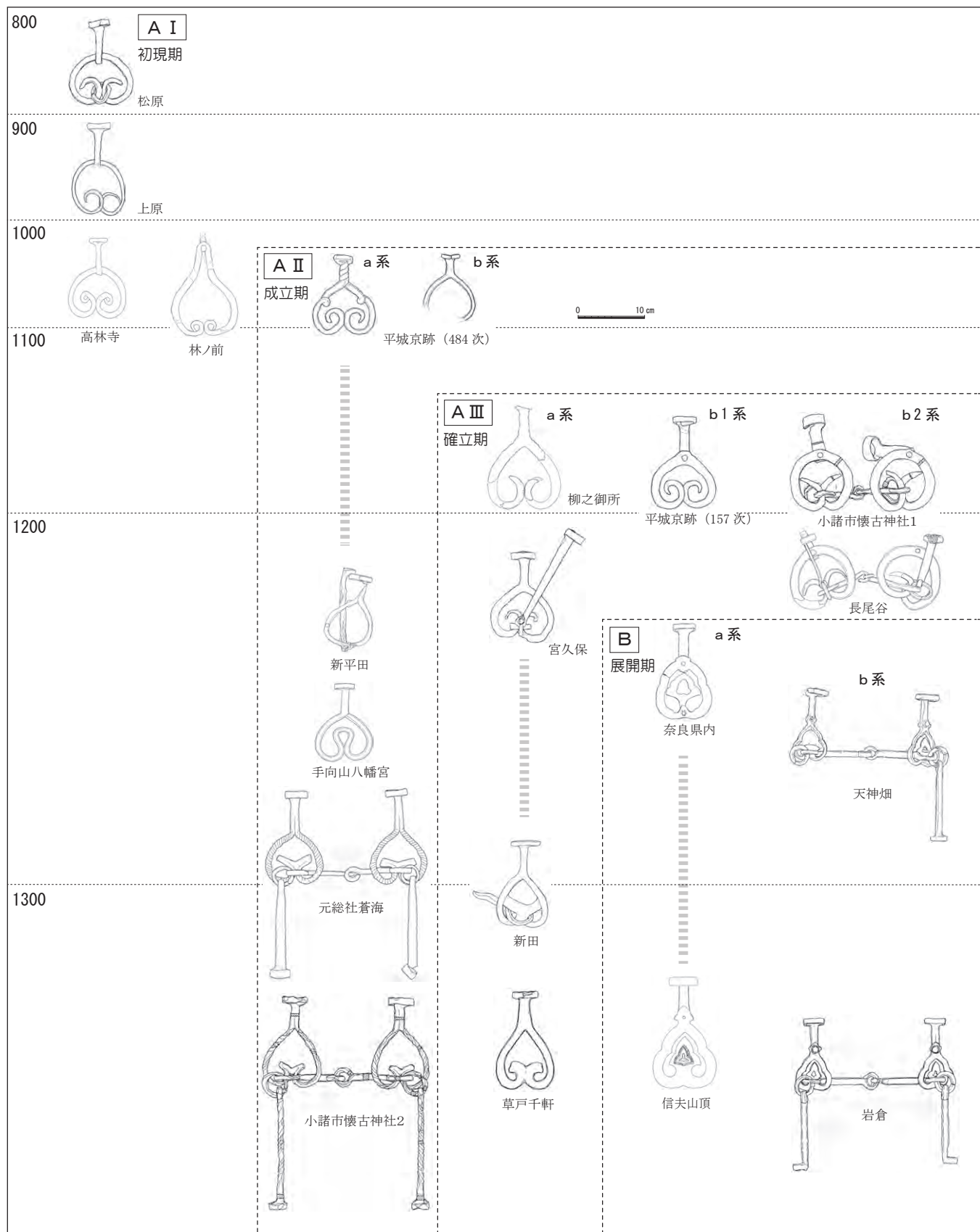


図8 杏葉轡の分類と変遷

工房の製品とみられている。いずれも序列高位の轡形式と推測できる 12 世紀後半の資料である。京都と奥州でのみ出土している点からみて、奥州藤原氏と関係を深めた藤原基成（平治の乱首謀者藤原信頼の異母兄）を通して都との繋がりを有したことを反映しているように思われる。それに対して、杏葉轡 AⅢ類には多系列の製品があり、装飾性は乏しく象嵌例もない。地方生産された b2 系もあり、鏡轡よりも序列が低い製品とみて大過ないだろう（図 8）。

東国武士団を編成して坂東南部に確固たる基盤を築いた源義朝は、保元の乱（1156 年）に勝利して、宮中の軍馬と馬具を管理し地方の牧の武士団も統率する馬寮の左馬頭となる（元木 2011）。これを契機として一般武士団との序列を馬装に反映させる政策を始めた可能性も一案として浮かぶ。その製作を合理的に実現させるための工夫が鉄板による鏡轡と杏葉轡のつくり分け及び別造り壺付き立間の鋳留仕上げではなかっただろうか。

展開期 B 類が出現し、中世を代表する轡型式が出揃って展開した 13～14 世紀を位置付ける。ただし、現在の出土資料による限り B 類の出現時期は明確でなく、今後の資料増加によつては 12 世紀後半に B 類も含めてすべての轡型式が出揃っていた可能性も否定できない。現状では AⅢ類 b1 系からの系譜をひいて B 類が現れると理解しておくが、片山が『伴大納言絵詞』から想定した多頭形（片山 1992）の存在が明らかになれば、それとの系譜関係も必然的に検討しなければならないだろう。B 類は AⅢ類と比べて装飾的であり、轡の序列では鏡轡の次に位置付けられる可能性（図 9）が高い。杏葉轡を新たに序列化する目的で B 類が創出されたとひとまず考えておきたい。

B 類は鏡板内側の三葉形板が別造りから一体造りへ、立間との接合箇所が三葉形へと変化し、内側三葉形板の

中央透孔等に刻み目のある金具を付加するなど装飾化が進行する。そして、小型品が現れ、伝世品を含めて鉄製あるいは銅製の鋳造品が製作されるなど多様化する様相を見せる。一方、AⅡ類 a 系・AⅢ類 a 系ともに同様の型式変化を示し、蕨手様の巻き上げが連結し一体化する。手向山八幡宮所蔵品の杏葉轡は、多様化した AⅡ類 a 系の一種として理解できるとともに、引手の連結に遊環を使用しない点で平城京跡第 484 次調査出土品からの系譜を想定できる。これらは大和での地域的展開を推測させる資料としても重要であろう。

IV まとめ

西大寺旧境内土坑墓 S X 71 出土腰刀については、3 条あるいは 2 条 1 単位の条線装飾と櫃や栗形を備える格の高い外装の黒漆刻鞘腰刀と評価した。中世的外装を整え定式化していく腰刀の初現的様相を示しており、現状の資料でみる限り 12 世紀後半でその有無が区分される。

次に杏葉轡について、全体的な形状は類似するものの製作方法や個々の特徴が明らかに相違する平城京跡第 157 次調査出土例と第 484 次調査出土例を杏葉轡全体の変遷を追求する中で検討した。その結果、従来想定されてきた立間別造り例から立間一体造り例への単系的な型式変化については、修正の必要性があることを平城京跡第 484 次調査出土例から示した。そして、平城京跡第 157 次調査出土例は 12 世紀後半の中世的轡確立期に生じた馬具の量産化と序列化を示す資料と位置付けることができた。

腰刀と杏葉轡の変遷をたどると、どちらも 12 世紀後半に大きな画期が認められることは重要である。先述したように、大規模な戦乱が続く 12 世紀後半は、武装具や馬具の需要が大きく高まるとともに編成された武士団の序列化が進展したとみられる。そのような社会的変革の実態を示す有力な考古資料として腰刀と杏葉轡を再認識する必要があるだろう。

註

- 1) 概要報告書には杏葉轡出土の記載が抜け落ちている。
- 2) 佐山遺跡例は柄鞘の条線装飾を糸巻きで行うと報告されているが、鞘木に直接刻線しない点で鞘巻腰刀とは区別されるため、本稿では黒漆刻鞘腰刀の範疇で理解しておく。
- 3) 柄頭・鞘尻にも無線刻部分が復元されているが、残存しないためにその有無は保留しておく。
- 4) 多量の腰刀が出土した静岡県堂ヶ谷経塚出土品（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010）を中心とし、神奈川県永福寺経塚出土品（鎌倉市教育委員会 2001）を含めて分析資料した。
- 5) 杏葉轡各資料の文献については、表 1・2 に記載する。

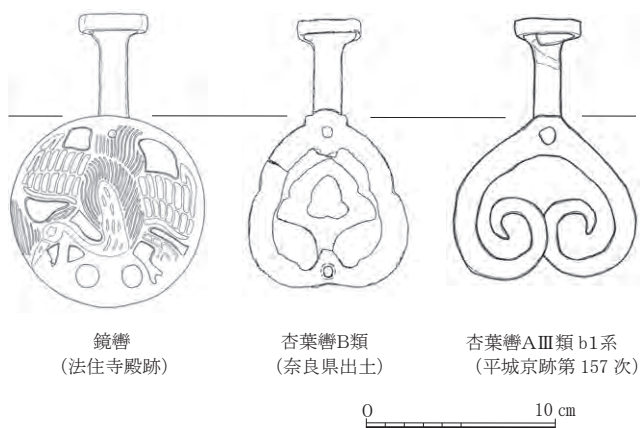


図9 壺付き立間鋳留轡の比較 (1/4)

- 6) 実測調査の実施にあたり、手向山八幡宮上司延禮宮司のご快諾と奈良市文化財課岩坂七雄・石田淳のご協力を得ました。記して感謝いたします。
- 7) 津野は岡安光彦の呼称に従い橘金具連結法と呼ぶ(津野 2012) が、古代以降において多く確認できるのは岡安がその一種とする「江田船山型」連結法(岡安 1984)である。橘金具は遊環と同じであり、本稿では遊環連結法と呼びかえておきたい。
- 8) 茅ヶ岳歴史文化研究所の佐野隆から多くのご教示と資料の実見・実測についてご配慮いただいた。記して感謝いたします。
- 9) 『集古十種』馬具之部卷之三の「大和國奈良東大寺八幡宮藏唐鞍圖」に鞍手様の巻き上げが分離するAⅢ類a系とみられる杏葉轡が図示されているが、現在行方不明のために実物は確認できない。

引用・参考文献

- 大竹弘高 2012 「堂ヶ谷経塚出土の腰刀に関する予察」『静岡県埋蔵文化財センター研究紀要』創刊号
- 小笠原信夫 1994 『日本刀の拵』日本の美術No.332
- 岡田賢治 2002 「腰刀の時代―刀剣からみた中世社会―」『日々の考古学』東海大学考古学教室開設 20 周年記念論文集
- 岡田賢治 2004 「絵画資料にみる腰刀―その変遷をめぐって―」『幸魂―増田逸朗氏追悼論文集―』
- 岡安光彦 1984 「いわゆる「素環の轡」について―環状鏡板付轡の型式学的分析と編年―」『日本古代文化研究』創刊号
- 風間春芳 1999 「長野県内の杏葉轡 3 例について」『長野県考古学会誌』90 号
- 片山寛明 1987 「日本の轡―奈良時代～江戸時代―」『馬の博物館研究紀要』第 1 号
- 片山寛明 1992 「和式轡の展開」『日本馬具大鑑』第 3 卷中世
- 鎌倉市教育委員会 2001 『国指定史跡永福寺跡 遺構編』
- 熊本県教育委員会 2001 『灰塚遺跡 (Ⅱ)』
- 倉本一宏 2022 『平氏―公家の盛衰、武家の興亡―』中公新書 2705
- 後藤守一 1937 『日本歴史考古学』
- 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2000 『志羅山遺跡第 46・66・74 次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告第 312 集
- 財団法人大阪府文化財調査研究センター 1998 『小畑遺跡』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第 36 集
- 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2003 『京都府遺跡調査報告書』第 33 冊
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010 『堂ヶ谷廃寺・堂ヶ谷経塚』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書第 219 集
- 財団法人古代学協会 1984 『法住寺殿跡』平安京跡研究調査報告第 13 輯
- 酒井元樹 2015 「中世の腰刀に関する形式的展開とその考察」『鹿島美術研究 (年報第 32 号別冊)』
- 末永雅雄 1928 「経塚発見の腰刀に就て」『刀剣と歴史』第 206 号
- 末永雅雄 1931 「経塚出土腰刀の一形式に就いて」『考古学雑誌』第 21 巻第 10 号
- 末永雅雄 1970 「平安朝時代の外装」『新版日本刀講座』第 8 巻 外装編
- 鈴木一有 1999 「律令時代における轡の系譜」『下滝遺跡群 2』浜松市博物館
- 鈴木哲雄 2012 『平将門と東国武士団』動乱の東国史 1
- 津野仁 2012 「古代轡の変遷とその意義」『考古学雑誌』第 96 巻第 3 号
- 栃木県教育委員会 2011 『下野国分尼寺跡―重要遺跡範囲確認調査―』栃木

県埋蔵文化財調査報告第 334 集

- 奈良市教育委員会 1989 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 昭和 63 年度』
- 奈良市教育委員会 2006 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 14 年度』
- 奈良市教育委員会 2010 『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成 19 (2007) 年度』
- 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 1996 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告 V 中世瀬戸内の集落遺跡』
- 福田豊彦 1995 『中世成立期の軍制と内乱』
- 松平定信編 1800 『集古十種』馬具之部
- 三重県埋蔵文化財センター 2000 『島拔Ⅱ』三重県埋蔵文化財調査報告 212 - 1
- 三好孝一 2001 「呑口形式から合口形式へ―大阪府小畑遺跡出土の腰刀例を通して―」『考古学論集』第 5 号
- 宮城県教育委員会 1980 『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第 72 冊
- 宮城県教育委員会・宮城県土木部 2005 『中野高柳遺跡Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第 201 集
- 元木泰雄 2011 『河内源氏』